

新版画の作家エリザベス・キース再発見

—東洋と西洋の枠組みを超えたその作画姿勢と作風の分析を手がかりに—

永谷侑子（慶應義塾大学）

大正時代、東京、京橋の著名な浮世絵商、渡邊庄三郎の働きかけにより興った新版画運動は、明治 20 年代以降、日本国内でその衰退の勢いを一層強めていった浮世絵版画に新たな息吹をもたらした。美術史上におけるこの一連の動きの中で、日本人作家に加えて、例えば、オーストリア生まれのフリッツ・カペラリを筆頭に、幾人もの西洋人作家たちが、東洋の事物に魅了され、それらを主題とした木版画を盛んに制作したことは大いに注目される。このような背景に鑑みたとき、いま一人、従来、新版画の文脈に位置付けられてはいながらも、未だ先行研究に乏しいスコットランド生まれの女性画家、エリザベス・キース（1887-1956）の活動を軽視することはできない。ほぼ独学で画技を習得したキースは、1915 年に初めて日本を訪れ、東洋諸国への旅の途中に自ら描きためたスケッチを、渡邊との出会いを通して、日本の伝統的な浮世絵の技法を用いて木版画として制作することに没頭した。

本発表は、エリザベス・キースの再評価を目的として、発表者が国内外で行なった作品調査の結果を十分に踏まえながら、主に、これまで看過されてきた、キースの作画姿勢の特徴および作品の様式分析を試みるものである。まず、キースの色彩感覚に焦点を絞り、実際の作品のみならず、作家本人による著作の慎重な再検討を行なうことによって、東洋の自然景の中に見出される深い青という色に対するキースの強い関心とともに、先行研究では具体的に指摘されることがない、白色味を帯びる非常に魅力的な青緑色や、パステル調の優しい色彩が、特に女性や子供の描写において効果的に用いられていることが明らかとなる。次に、作品の技法面における様々な特徴を、浮世絵との関連を考慮しながら仔細に分析し、さらに、キースと同時代の代表的な新版画の作家、リリアン・メイ・ミラーやポール・ジャクレーらとの比較を通じて、「西洋の一女性画家」としての、キースの内面性に一段と迫った考察をも試みることによって、作風形成の根底にある、キース自身の東洋に対するまなざしについて、次のような私見を提示することができる。すなわちキースは、東洋の風物を単にピクチャレスクなものとしての、異国趣味的な目線で捉える作画姿勢とは大きく異なり、現地で目にした人々の生活、些細な日常の一こまに寄り添って、その一瞬一瞬を、自身の鋭い感性、親しみと尊敬の念をもって、一枚の画面に仕上げる態度に徹していた。そしてそれゆえにキースの作品は、他の比肩しうる作家たちが共有していた、視覚的に斬新な装飾性ないしデザイン性を重視した、いわば様式化された画面構成に傾倒することなく、より自然で人間味あふれる独自の作風を存分に発揮しているという点において、高く評価すべき重要な作家である、と結論づけられるのである。